
Il n'est point de bonheur sans nuages.

一河善知鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Il n'est point de bonheur sans nuages.

【Nコード】

N2550B

【作者名】

一河善知鳥

【あらすじ】

『Il n'est point de bonheur sans nuages.』幸運は不幸があつてこそ生まれる（意訳）『いつからが幸せで、いつからが不幸なんだろう。その真ん中ってどこなんだろう？ ずっと、ずっとその答えを探している』

#0 一瞬のことはくると

「あーもう、わかった！ありがとう。ありがとう！ありがとう！！
：これでええねやろ？」

大輝は次第に声をあげて、言った。その瞬間、ぱきつと薄いガラスが割れるような衝撃があった。大したことあるような、ないような。考えなきゃわからない感じの衝撃だ。

「違う！そーいうん違う！」

だからあたしは考える時間がほしくてとりあえずそう言った。けど、大輝はくるっと後ろを向くと何も言わないで階段を降りていった。まった。

それでも冷静になれないあたしは大輝を追いかけてもせずに何か言おうとした口を開けたままにしていた。

―違う。

せみが、異様に五月蠅かった。

「まだ、梅雨は明けたばかりやん…」

がたがたと壊れそうな音をたてて、また駅に電車がやってきた。

#1 まるいパズルはないけれど

「普通でええねん」

少年だった大輝は口癖のようにそう言っていた。子どもにしてはやけに大人びた口調と、冷めた目で。子どもにある、競争心のようなものがまったく感じられなかった。まるで、同い年じゃないみたいな感じがしていた。

あたしはそのころーというか今も十分にだけどー、驚くほど負けず嫌いな性格で、プライドが高いといったらいやな感じだけど、とにかく悔しいという感情が嫌で、それを避けるためなんだってやれた。まだ小学生だったとき、かけっこでどうしてもクラスの男の子に勝つことが出来なくて夜に秘密の特訓をしていたり、テストの点が学級委員長より二点低いことが理由で塾に通ったり。今考えるとちょっと可笑しいけれど、あたしは負けるのがそれほどに嫌いなのだ。

だけど、大輝はそんなときにもあたしに「普通でええねん」って言った。

それから大輝は決まって、あたしの目を見ないまま、「頑張るすぎ」とか、「それでも十分」とか付け足す。今だから言えるけど、そのちよつと照れている大輝があたしは好きだった。だから、余計に頑張って、心配をかけたりもしてしまった。

「普通でええねん」

あたしは久しぶりに呟いた。お酒のくらつとする匂いと、なにか脂っこいものの匂いが混ざる居酒屋。あたしの目の前には当の大輝がビールを飲んでいる。

「ん？」

どこかで聞いたようなせりふだな、という目をして、大輝は首をかしげた。その身体は中肉中背で普通。おまけに高くも低くもない声

でこう言った。

「それ、俺の口癖やった」

返事に期待はしていないというか、その返事で個性はアピールできないけれど、酔った上でその普通の反応にあたしは笑ってしまった。大人になった大輝は本当に文字通り『普通』だった。

「何？」

ひじについて大輝をじっと見つめていると、困ったと怖いの間の顔をして聞いてきた。

「何でも」

あたしは言って、ウーロン茶のグラスに入ったストローに口をつけた。ストローを噛む癖が未だに抜けてないのがちよつとがっかりだった。

大輝に一口だけもらったビールを咽喉から消すようにウーロン茶をぐびぐびと飲む。いつも、居酒屋に来るときは交代で車を出しているからだ。

歩いて帰れない距離ではないけれど、どっちかが覚めていないと次の日何をしていたのかまったく思い出せなくなる。まったく、二人揃って酒癖が悪かった。

大輝とお酒―片方はお茶で酔ったフリだけ―を飲むのは、今月に入って三度目。今日はあたしが運転して帰る日だった。

「ええねん」

急に言った大輝は、まもなく届いたサラダにゆずのドレッシングをなみなみかけた。

「何がええの？」

あたしはそれをお皿に盛ってから、レタスとトマトとエリンギを一口で食べた。さっぱりしているけど、しょっぱかった。

「普通で、ええの」

あたしは目を見たのに、大輝はトングから落ちたエリンギを見てた。でも声は、確かにあたしに向かっていたから、あたしはちよつと笑った。

「そやね。それで、ええねん」

#2 大切なのは後ろ側

ぼうっとしていた。飲んでいないはずのお酒に酔ったみたいな感じ。親がいない、一人には広すぎる家は殺伐と、月明かりの溜まり場になっていた。なぜか転がっているビーだまが煌々きらきらとひかって、あたしはそれに目をやるけど、ビーだまは所詮ビーだまだった。ただのガラス玉。得失なく転がるそれ。

見ても仕方がないのであたしは上着を脱いで、それをベッドに放り投げてから、ソファでくつろぐかお風呂に入るか迷って、また立ち止まった。

振り返ってみると大人な自分。お母さんに言われてあれこれしてたときは全く違う自由なあたし。

早く大人になりたかったのは大人に勝ちたかったからで、お酒やら煙草が規制されていることが悔しかった。けど実際にお酒を飲んでみると何だかそれはそれで負けた気がしたし、煙草は結局まだ吸ったことがない。

それからあたしは大人だから妥協を知っていた。

結局、ソファでくつろぐのは時間がもったいない気がして、お風呂に入ることにした。

湿気。湿気。湿気。湿気。

お風呂にお湯を張ると自分の足下が見えなくなるくらいの湯気が室内に溢れた。外の寒さとは真逆といえる暑さに、ぶわっと汗が滲み出た。で、あたしはそれをシャワーですっきり流した。残ったのは存外つべつべな肌と、遮る湯気が消えて陽気にひかる電球だけ。あたしははなうたを奏でて、お湯をぽしゃっと打った。

いつのまにか、ぼうっとした気分は消えて、いつもの夜中がそこにはあった。

「これ、全く普通やなあ」

あたしは呟いて、火照った身体のまま夢の中へと落ちていった。

#3 温かい家族は世界をこえるのだ

「ほんまありがとうねえ」

大輝のお母さん―あたしは中学生の頃からゆうこさんと呼んでいる―の独特な柔らかい声があたしの感情のどれにも触れることなくすっと耳に届いた。

本当に律儀な人だな、と思う。毎回、あたしと大輝が飲みに行くたびにゆうこさんは電話をかけてきてくれた。「いつも大輝の面倒見てくれて、ありがとう」と。あたしは、「そんな違^{ちや}いますよ」なんて言ってみるけれどどうもゆうこさんのような柔らかさを出すことができずに、ケンソンしてますアピールみたいになってしまう。だから、声を縮めて、こう付け足す。

「誘たん、あたしやし…」

この一連のやり取りが飲みにいった次の日に決まって行われていた。家族的な温かさを感じさせられる会話。あたしはそれがまた、幸せであった。

別に別居でもなんでもないのだけれどあたしのお母さんとお父さんは今、家には帰ってこない。

「あたし、一人暮らししたいんやけど…」

就職先が決まって、それに備えて春休みに家でごろごろしていたときのこと。あたしが何気なく相談した次の日に二人は家を出て行くことをあたしに告げた。ちょうど、雑誌の編集に携わっていたお父さんが取材でフランスに行くことになっていたのだ。お母さんはそれに自分も着いていくと言った。それから「これで一人暮らしやね」とも。

「浮気せえへんか心配やんなあ」

「せえへん！」

そう言って、二人はフランスへと旅立った。イリュージョンのごとく、あまりに突発的に居なくなってしまった二人にあたしは「一人

暮らしてこういうことやの？」と言えないままになってしまった。

「へえ。純奈ちゃん（あたしの名前）、びっくりしたやろ？」

ゆうこさんは言った。二人が日本を離れたその日の夜だった。大輝に電話したつもりで、苗字が一緒だから間違って、ゆうこさんのケータイにかけてしまったのだ。とにかく誰かに聞いてもらいたかったあたしはそのまま、その日のことを話した。

「ええ、ほんまに。まだ聞いてから一週間も経ってへんのに…」

あたしはポケットに入れっぱなしだったお母さんの写真をじっと見つめて言った。着物を着ているお母さんとその友だち。少なくともパリジェンヌに囲まれているよりはしっくりきた。

「…せやけど、準備は結構前からしててんで？」

「ほんま？…ていうか、ゆうこさん知っとったん？」

「当たり前やん。純奈ちゃんのお母ん、真っ先にわたしの相談しにきててんもん」

電話越しに温かい笑い声が漏れた。心地よかった。

その日の夜はちよっぴり寂しかったけど、次の日の夜中に国際電話で、お母さんが「ボンジュール、純奈。こっちは今、夜やで」と楽しそうにしている声を聞いたら、すぐに元気になれた。

「せやけど、お母さん。『こんばんは』は『ボンソワール』やで」最後に言っ、電話を切った。なんでそんなこと、知っていたのだろう。ちよっとそれが、可笑しくってそのまま寝て見た夢はなんだから楽しいものだった。

#4 例えば水溜りに空が映るように

あたしの名前。純奈。

由来は平安時代を生きた第五十三代目の天皇である淳和天皇^{じゅんな}で、お母さんがつけてくれた。

そんな、日本人らしい日本人のお母さん。

今日はそんな母から久しぶりに電話があった。

「ホームパーティであるもんだだけで作ったたこ焼きがめっちゃ人気で、最近をよく近所の人にも作っててん！」

だ、そうだ。お母さんはきちんと自分らしい生活のままフランスでも楽しそうにしていた。そういえばこの前はお父さんの仕事相手のピエールさんの奥さんと一緒にパリに買い物に行ったとも言っていた。そうやって楽しそうに話すお母さんの声を聞くと、フランスに行ってよかったんだな、と思う。あたしの一人暮らしも板についてきた。

「そやなあ。やけど普通とは違^{ちや}うわ」

電話越しの大輝が言った。お母さんの話をそのまましたのだ。大輝が突然フランスに行くなんて道を外れたことをしそうにないな、と思いつつながら。親機のコードをくるくるする癖が抜けてなくてまたがっかりした。

「お母さんの知り合いにピエールさんやもんなあ。ほんと、普通やない」

あれからまた、大輝の口癖は「普通でええねん」になっていた。それと同時に、あたしの口癖も。

「けど、ええよな。お母んめっちゃ元気やんか」

「ゆうこさんかて…」

そこまで言って気がつく。大輝の笑いが空気の抜けるような弱いものだということと、ゆうこさんの現状。

ゆうこさんは大輝が小さい頃に遭ってしまった事故のせいで歩くということができなかった。ただ、あまりそれは感じられないくらいにいつもゆうこさんは元気だし、一人でも車椅子でどこへでも行ってしまうような人だった。大輝の声のトーンが下がったのは、最近になってそんなゆうこさんが足の痺れを頻繁に訴えるようになったからだ。

この前のみに行ったときにやたらと酒を飲んでいたのはそれを忘れるという目的でもあったと、大輝自身は言っていなかったけどあたしは感じていた。

「ああ：言ってもうた」

なんて後悔は遅くて、大輝は静かになってしまった。どんと苦しい空気が電話越しに伝わってくる。

あたしは仕方なく、恐る恐る聞いた。

「ゆうこさん、大丈夫なん？」

この前電話したときには「純奈ちゃんちやが心配するほどのこと違う」と笑っていたけれど、ときどきした。

「よおわからんけど…」

大分、間を開けて大輝は口を開いた。

「よおわからんけど、先生が言うと思ったんは、薬を飲むが一番やって。痺れ止めみたいなのやつやねんけど」

無感情になった大輝はきつと目を閉じながら眠るような感じで、言った。あたしはその先の言葉をただ待っていた。

「薬飲んでるんがめっちゃ病氣持ってます、言うてるみたいで嫌やねん」

「えええよね：普通が…」

あたしの声もただ口から零れるみたいに意思がはつきり込められてなかったように思う。

「せやでえ」

だから大輝の返事も半端というか、微妙であたしは更にがっかりした。

「ま。なんだかんだ言うてもお母ん、いつもどおりに元気やけどな」
声のトーンが変わっても、何も変わっていない気がした。無理に普通という枠にねじ込まれるとうと必死になっているようにしか感じられなかった。

「ゴメンね？」

「なんでやねん。心配、ありがとう。お母んにも伝えとくで」
謝ってしまったあたしに間髪いれずに言った。もう、大輝は笑っていた。それで、あたしはついそれに甘えて、「よかったあ」なんて言ってしまった。

全くだめなやつだな、と思ってしまふ。大輝の優しいところに甘えてばかりで、否定すべきことを否定できずにいる。

「ほんまに、嬉しい。電話もありがとな。ほな、俺やらなあかん仕事あるし、またなあ」

こんなときの大輝はとことん優しい。あたしの全てを知っているような気がして、あたしの全てを包み込んでくれるような気がして。で、また、甘える、だめなあたし。

#5 二つの果実、二つの季節

「すはぁー」

犬みたいに息を吸ってみたら目覚めがやたらにすっきりとしていた。ぱっちり開いた目がひかりをたくさん吸い込んだ。ひかりはあたしの体内でエネルギーに変わり、循環する血の中に元気になる成分をいっぱいばら撒いていた、気がする。

本当は今日でお休みが終わり、また明日からは仕事に追われる毎日になるから、ちよっと寂しい、後ろめたい気分になるはずなのに。ちよっと変だったけど、この際気にしないでいつも通りの休日の幕を開けた。

今日は、ゆうこさんに会いに行こうと思っている。世間は日曜日だから、きっと大輝も寝ているはず。いきなり家に行って驚かそうとちよっとわくわくしていた。電話のことも、ひとまず考えなかった。

調子のいいあたし。冬のからりと晴れた空のように身勝手に、受け止めてくれる優しい人―大輝やゆうこさん―の存在は不可欠だった。まだまだ、子ども。子どものころから大人みたいな大輝とはまるでパズルみたいな関係だった。

真逆のくせにぴったりはまる。さしずめあたしは凹んだほうだけだ。

髪を適当に束ねて、あたしは家を後にした。外は寒かったけど、落ち葉のしゃくしゃくという音がいい感じにリズムを刻んで明るくて楽しい世界が広がっていた。

「純ちゃん？」

声をかけられたのは落ち葉の中にいくつかどんぐりを見つけたときだった。秋と冬が混ざった季節だ、と思っていたら肩を叩かれた。

「うん？」

あたしは聞いたことのあるような、ないような、どちらかといえば聞いたことあるに近いような、近くないような声に首をかしげた。まず振り返って確認するという動作をしなかったのは、いきなりのクイズをちよつと楽しみたえかったからだ。

「あたしや、あたし。昔、そのマンションに住んどったイチハラ……」

「麻衣子や！」

人生の中のイチハラという苗字の人を思い浮かべたらすぐにわかってしまった。なにしろ、イチハラは麻衣子と、保険会社のおばちゃん――幼かったあたしにいつも飴をくれた――だけだったのだ。

「よう覚えとったなあ」

麻衣子はあたしの前に出てきて笑った。昔はあたしと全く同じ慎身長だったのに、いつのまにやらあたしよりも全然大きくなっていた。見上げなきゃ見えない美衣子の目。変わらず綺麗な青だった。

麻衣子はクォーターなのだ。お祖母ちゃんがイギリス人。もちろん、小学校の頃に、今あたしたちの目の前にあるマンションから引っ越した先もイギリス。たしか、コッツウォルズという田舎町だった。

「なんでこんなところおるん？てか、十五年ぶりやん！背、でかつ！相変わらずかわいいねんなあ。イギリス帰り？関西弁のイギリス人や！」

「待って、待って。あたしまだ何も言ってへん！」

気がついてちよつと恥ずかしくなった。小さい頃、聞き上手だった美衣子を前に、ついつい色々と話してしまった。相槌を打たせる隙もなく。麻衣子は「変わってへん」とからから笑った。

「今、何してたん？」

「大輝……って覚えてる？松本大輝」

麻衣子はすつと目を細めて、本当に自然に笑った。それから、「覚えてる」と言った。

「その大輝の家に行こうと思っててん」

あたしは大輝の家らへんの方角を差して言う。

「それって、今すぐやないとあかん？時間あるんやったら、ちょっとお茶でもせえへん？」

そしたら麻衣子は白いベルトの時計に目をやって、呟くように聞いてきた。ちよつと迷ってあたしは「ええよ」と返事をする。もともと遊びに行く連絡を入れているわけでもなかったのも、お茶するついでにゆうこさんが好きなパンでも買っていこうと思ったのだ。駅前の『フィーネル』という名のパン屋さん。二階がカフェになっていて、お土産も買える。あたしはそこへ行こうと麻衣子を引っ張るようにして落ち葉をまた踏んだ。

二人分のしゃくしゃくがより軽快に響いた。

#6 一も十も変わらない世界で

日曜の午前のフィーネルは開店したばかりで殺伐としていた。まだ目覚めてすぐの寝ぼけ眼のようなゆったりとした空気が流れていた。今日はあたしたち以外に散歩ついでに寄ったという感じのおばさんと紐に繋がれた柴犬、それにおじさまと呼ぶに相応しい感じの彫りが深い男の人の二人と一匹だけだった。

「ここで買ったやつは、二階で食べてええねん」

あたしはお店のことを一通り話して、麻衣子にパンを取るためのトングとトレーを渡した。

「なんか『ビーンズストア』みたいやな」

麻衣子はあたしと話しているから、自然と下向きになった。

「ロンドンにビーンズストアってお店があってん」

わたしが逆に麻衣子を見上げてきよんとしたら、そう付け足してくれた。それから麻衣子はまたしても自然な、流れるような笑顔であたしに向けた。

小さいころにはなかった、麻衣子との身長差は本当に心地よかった。並んで歩いているときとか、あるいはカフェで向かい合っているときとか。やっぱりイギリスのこと、もっと言う让世界のことをいろいろと詳しいから、お姉さんみたいに感じた（あたしはまた、子どもに成り下がる）。

「実はな、報告せなあかんことあってんやんか」

麻衣子は紅茶を飲むとふんわりとそんなことを言った。それからまもなく、パンを一口の大きさに千切って続けた。

「あたし実は結婚してん」

ぽつん、と言葉が響いた気がした。「やっぱり麻衣子はお姉さんやなー」とぼうつと思った。

朝日にきらんと太陽色―小さいころからの癖であたしはオレンジを太陽色と呼んでいる―の宝石がひかった。

「じゃあ…、イチハラマイコちゃん？」

ちよっと外れた質問だったかもしれない。麻衣子はくすつと微笑んで、ぼそつと恥ずかしそうに口を開いた。

「麻衣子…ふおど」

あまりに小さな声でよく聞き取ることができなかった。あたしは「へ？」と麻衣子じゃなきゃ許してくれなさそうな、困り顔をした。

「えっと…麻衣子・ハルフォード」

麻衣子はもう一度、さっきよりちよつとだけ大きな声で言った。イチハラマイコから、マイコ・ハルフォード。ちよつと羨ましかった。麻衣子が言うに、夫のショーンさんとは中学校の頃からの友達で高校のときにはもう付き合っていたそうだ。サッカー部のキャプテンとマネージャー。世界は広くても人は変わらないんだな、なんて思った。

それから、驚くことに麻衣子は妊娠三ヶ月の妊婦だということをあたしに告げた。着ている服のせいであまり気がつかなかったけど、触ってみると確かに新しい生命が感じられた。

少し奇妙だった。少なくとも麻衣子が転校する小学三年生のときにはあたしたちに差なんてほとんどなかったのに、たった十数年こんなに変わるとは。

ただあたしのところはそれ以上に麻衣子が家族を持つことに喜びを感じた。

#7 現実を見つけたときの笑顔のように、二人

「そういうたら、なんで日本におるん？」

パリパリピザーきわめて薄い生地にとマトやチーズを乗せて焼いたもの―はフィーネルのパンの中で一番好きで、麻衣子にもそれを半分あげた。あげながら、そう聞いた。麻衣子はあたしの止まらない質問の渦に巻き込まれてしまっていた。

数えてみると実に十三年。初めのほうこそエメールを送っていたけど本当にいつの間にか音信不通になっていた。積もる話は山が作れるほどたくさん。麻衣子はその一つ一つに丁寧な答えをくれるから、あたしの口はさらに止まらなかった。

「明後日にな、…どこって言うたらええねやろ、小学校の近くにある教会やねんけど、そこで式するん」

言葉に反応するように太陽色の宝石がきらんとひかった。あたしはついそれに目がいつてしまう。

「あ、これはプロポーズのときにもろてん。今あたしの中で一番大事なものやし、ホテルとかに置いときとーないねん」

「ホテル泊まってるん？」

あたしはずっとその指輪に注目しながらも麻衣子に聞いた。麻衣子は「マンションで隣にいたおばちゃんどこいてん！」と口を尖らせた。あたしはその口にずっとアイスティーのストローを持っていた。

「あほっ」

麻衣子は、言いながらもアイスティーをぐびぐび飲んで、潤った口にメロンパンを放り込んだ。

「なあ、ほんなら、うちに来い^きひん？ホテル代結構すんねやろ？」
随分タイミングの外れた提案だった。麻衣子の「これめっちゃふわわ」という声ともかぶった。麻衣子はきょとんとしてから、パンを飲み込むと同時に理解した。

「でも、シヨ―（シヨーンさんのこと）もおるんよ？純奈のパパマに迷惑やん」

「平気。今お母さんとお父さん家にいてないし」

あたしはわくわくした。イギリスにいた麻衣子に両親がフランスに
いることを言ったら一体どんな反応をするのか。案の定、「どこに
おるん？」と聞いてきた麻衣子にあたしは言った。

「二人で今、フランスにおんねん。フランスのサンジェルマン・ア
ン・レっていうところ」

「ほんまに！？じゃあ、あたし、純奈のパパとママの近くにおった
ってこと？」

あたしはさっきまでの麻衣子を真似するように流れるように笑った。
麻衣子とはとにかく驚いて目をくっと思開いている。

「せやで、今は立派にフランス語話してんねん」

「意外やわあ」

「麻衣子かて英語できるやんか」

あたしは羨ましい目で言った。

「ノー。アイキャントスピークイングリッシュ」

滑らかでネイティヴな発音で麻衣子は言った。あたしは圧巻されて、
「できとーやん」と小さく言った。麻衣子はえへへ、と笑う。すご
く嬉しそうに。

懐かしい笑顔。

#8 ひかる明日に甘い香り再び

麻衣子が今朝、昔住んでいたマンションに来ていた理由はどうやら二つあったらしい。一つは、自分の住んでいた401号室が今どうなっているかをみることに、そしてもう一つがあたしに合って結婚報告をすることだった。直感であたしがまだ同じ家に住んでいることは確信していたそうで、「いーひんかったら誰かに聞いて探そうと思ってた」とあたしも聞いて懐かしいと思うような名前を次々とあげた。あたしはその一つ一つにわかる範囲でどうなってるか教えてあげた。

例えばあたしと麻衣子とよく遊んでいた美咲、一年前に帰省してきたときには来年からは美容院で、見習いだけど有名なお店で働いていたと言っていた。

例えば小さい頃に麻衣子がよく話を聞かせてくれた―今思うと麻衣子は恋をしていた―高坂君。今は風の噂で教員試験に受かったと聞いた。

「それじゃ、夕方にまた純奈の家に行くし」

麻衣子はカバンを持っていないほうの手を手持ち無沙汰にして、頬を触ってみたりしながら言った。いつの間にか太陽は天辺をも過ぎて西に傾き始めていた。

「：ほんまにありがとうね」

身長的に、頭を撫でられるのが自然な動作な気がしたけど、麻衣子はあたしの頭を軽く、きゅっと、抱きしめてくれた。

「何言うとなんの…」

なんだか異様に嬉しくなってしまうと、「あれ、おかしいんかな」なんて思ったけどそれはお母さんに抱かれたときの安心感に似たものだった。

「頼りにしてくれて、ええねんで？」

なんて言っただけ絶対頼りにしてしまおうと思った。それから麻衣子は「サンキュー」と綺麗に言って、くるっと背を向けた。

「また後でね」

あたしはその背中に言って、もう一度フィネルの中に入った。

パンの香りが再び鼻に届く。優しく暖かい小麦粉とその他甘いものの諸々の香り。ちょうど店長の和泉さんが焼きたてのクロワッサンを持ってやってきた。

「あ、純ちゃん。来ててんか」

髭に長いコックの帽子。見るからにパン屋さんな和泉さんは試食用のクロワッサンをあたしに目で勧めた。

「上出来やね」

あたしはそれを一つ摘んでお客さん代表としてそう言った。

「ありがとうございます」

和泉さんは丁寧に頭を下げると、驚いた顔の入ったばかりのバイトの女の子に「純ちゃんはパンを見る目が人一倍あんな」と説明した。

「せやけど今のちょっと偉そうやった」

あたしは苦笑いを浮かべて、だらんと片手で持っていたトレーにクロワッサンを二つ乗せた。ゆうこさんと大輝の分。

甘いもの好きな大輝のお父さんにはアンドーナツを買ってから、工房に戻った和泉さんに挨拶をした。

「また明日も来ますさかい…」

「分かってるよ。最高に美味しいん作っとく」

「ありがとう」

それから外にでると、なぜか一瞬、どこ行くんだかわからなくなっ
て振り返った。バイトの女の子と目が合って、軽く微笑むと、「アシタモマッテマス」と薄い唇が動いた。

#9 しきつめた思いに風の一部

「ああ！イチハラマイコってあの市原か」

台所でゆうこさんが心地よい鼻歌を歌っている。どうやら早速パンを食べてくれるようだった。

大輝はあたしが必死になって説明すると、「イギリスに転校してもうた」のところでやっと思い出した。だいぶ深く記憶を掘り下げた。大輝は実に美咲を思い出すのに五分。さらにそれを含めた説明を十分くらい聞いてやっと理解したのだった。

小学校に行ってた頃はよく、あたしと麻衣子と美咲と大輝の四人で一緒―大輝は「何で俺こんなところおんねん」って顔してたけど―に帰ったりしていたのに、そういうちょっと普通ではない記憶は優先的に埃を被ってしまうみたいだ。

「そんで、その市原がどないしてん？」

大輝は麻衣子を思い出すための十五分をがなかったかのようにあたしに質問した。

「もう市原違^{ちや}うねん」

「どゆこと？」

大輝が四文字で聞いた。大輝はよく四文字―「なんでや？」とか―「どしたの？」とか―で聞き返してくることがあった。

「結婚しててん。やで今はマイコ・ハルフォードいうねん」

あたしが言って、テーブルの上に雑に転がった紙に名前を綴った。大輝は興味津々にそれを見て、復唱した。

「イギリス人と結婚なんて、『普通やない』やろ？」

あたしはユニオンジャックの絵―何かズレている感じの猛烈に下手なもの―とその隣に日の丸を描いた。

大輝はただ、「この絵が普通やない」とけらけら笑っていた。あたしはむきになってもう一度描こうとしたが、青のペンがなかったので、断念した。

「今のは適当に描いてん！」

大輝は適当に、本当に適当に「さいでっか」と言った。

「でな、今日から麻衣子が家に来んねやんか」

あたしはくじけずに続けた。

「いや、知らんがな」

「…来んねん」

「あ、ほんま」

「そう。んでな、今日、そろそろなんやけど…大輝も家来えへん？」

「…別にええけど」

大輝は流れて言ってしまったという感じだった。一瞬だけ目を泳がせて、ごくわずかに頷いた。

「よかった。じゃあ、行こう？」

あたしはその隙にそう言っ、半ば無理やりに大輝を誘った。大輝はめんどくさそうな顔をしたかと思うと、声に出してはつきりと「めんどくさい」と言っ、それでもケータイをポケットに入れて黒の薄いコートを羽織った。あたしはゆうこさんに「いってきます」を言っ、ばたばたと玄関へ向かった。

「もう来てるかもわからん」

駆け足で空気の境―松本家の温かさとの冷たさの間―を乗り越した。

冬はやたらに日没が早いから、空はもう薄暗くて世界は眠りかけていた。あたしは大輝と並んで、家に向かった。

#10 一瞬のあとはからからで

純奈の動揺の目線をはっきりと背中に感じながらも、瞬間的に記憶を飛ばしたように無心になって立ち止まりも振り返りもせずに、駅のホームを後にした。

梅雨が明けて、いよいよ暑くなるという空気が町全体を覆っている。

せみもそろそろ目を覚ます。

俺はどこに行ったらいいかわからなくなって、学校のほうへ何となく歩く。放課後を持って余している同じ学年の生徒が何人か横を通ったけど、絶対に話したくない気分だったから最大級に気配を消して道の端っこを歩いた。

「なーにしてんねやろ…」

ふいに小学生の頃に純奈とその友だちに連れまわされて帰っていたことを思い出した。同じような気持ちを抱えてぼうっと歩いていた。三つの赤の中に黒が一つ。

普通がいいなんていう考えが、そろそろ碎け散るような気がしてた。何がよくて、何がだめなのか。わからないからその真ん中にある普通だってわからない。

それに、知ることもまた、怖かった。きっと全てを知ったところできっと今の俺は普通という場所には分類されない。悪い意味で突飛な存在。

心なしか太陽が冷たく感じる。

いつもの道すらもちよっと変わって見えた。全てが意思を持たない植物や石や鉄でよかったと思った。思ってから、なにを考えてるかわからなくなった。

―なに、してんねやろ…

俺は何となく、その場の気分で、通りかかったコンビニに入って、お気に入りの漫画の最新刊を手取った。立ち読みされすぎてその

本は既に痛んでいた。

#11 嫌ではないけれど

嫌ではないけど、俺が小さい子どもだったころから知っている純奈という人間はものすごく鈍感だった。それを「自分でうすうす気がついている」と思い込んでいるから、わかっているようにでもわかっていない。ただ、自分が鈍いせいで何かあったときの謝り方があまりにも必死だからみんな―俺を含めて―純奈のことを憎めないんだと思う。

「そうやったん？ゴメンな。わたし全然だめやな…」

未だに真顔でそう言われると、どきっとしてしまうのが困る。最大限に可愛く、申し訳なさそうに謝れば大抵の男は許してしまう、ということには気がついていないから、作っていない、心の底からのゴメンなのだ。

純奈は今日も、言った。

この前お酒を飲みに行ったとき以来、ずっと『普通』という言葉に固執していたからそれを注意したのだった。昔みたいに、俺はそこまで普通にこだわる気はなかった。純奈は申し訳なさそうな顔を続けて隣を歩いてたけど、びゅう、と向い風が舞ったのがきっかけに、すぐにもとに戻った。

「せや、さっきの話もやけど…」

ここぞとばかりに話を切り出したのは、何も一概に純奈にいい人だ、と思われたいわけではなかった。

「さっきで、いつ？」

純奈は顔を覗き込んだ。

「イギリス人と結婚ってやつ」

純奈は「あ、うん」と意外だ、という顔をした。

「市原…麻衣子は、その相手を真剣に空きなんやろ？なら、別に普通や思うで？普通に男女が好きで、結婚。っでだけやんけ」

「国境なんて関係ないちゅうことか」

俺は楽しそうな純奈を見て頷いた。

「…てか、大輝、『普通』に固執してへん言うたやん！」

「それだけなんか言いたかったん」

俺はからからと笑って、ちよつと足を速めた。元・市原がもう待っているという純奈の家に向かって。

#12 触れない音楽響く夜が

夫のショーンさんは思ったよりも日本語がうまくて、まず俺はそれに驚いた。

それから、思ったよりも身長が伸びた麻衣子に驚いて、その麻衣子にもう一人の命が宿つてると聞いて驚いた。純奈は「驚きすぎやん」と笑っていたけれど、その後で、「ショーンさんの日本語すごい？」と耳打ちをしてきた。

家ではまず、純奈と麻衣子がそれぞれの得意料理を作ってお互いに振舞った。麻衣子は日本の代表的なものとして肉じゃが―純奈が俺のお母んが教えてもらったもの―を、麻衣子はミートパイというものを作った。肉じゃがはいつも食べているものと変わっていないかったけど、「麻衣子のより美味しいんちゃう？」と笑いながらショーンさんはその大きな口でばくばくと食べた。一方、ミートパイは初めて食べたものだけど、癖になりそうな味だった。純奈がいつも行っているフィーネルにありそうなふわふわでぱりぱりの食感で、ショーンさんと俺で合わせて、直径十五センチのパイを三つを平らげてしまった。

「すご…」

麻衣子と純奈はそれを見て哑然としていた。

それからちよつとして、麻衣子と純奈は昔の思い出の話を始めると、ショーンさんが言った。

「僕たちは邪魔みたいやね。あっちへ行こうか」

ビールの入ったコップを持った手で、ソファアを指さすとよつと立ち上がる。身長は家にいるだれよりも大きかった。

「ショー、飲みすぎひんようにな？」

「うん、わかってるよ」

夫婦の会話や、と純奈と目を合わせて思った。二人はいたって幸せそうだ。

「大輝は純奈のこと愛してるん？」

俺がソファに腰を下ろしたと同時にショーンさんが聞いて、俺はもう一度立ち上がってしまう勢いで「ええ？」と言った。

「どないしてん」

それに反応して、麻衣子は聞いた。すると、ショーンさんが英語で、なにやら言った。まったく聞き取れなかった。その後、また聞き取れない言葉で麻衣子何かを言う。そしたらショーンさんが、顔を真っ赤にして笑った。何がなんだか、わからなかった。純奈も同様にショーンさんと、麻衣子を順に眺めていた。

「ショーンさん。今、何言うてたん？」

俺が聞くと、ショーンさんは、「ちよつとね」とごまかした。

「それから僕のこととはショーンって…呼び捨てでええし、日本人ってすごくかたいよね」

ショーンは更に言って、話を摩り替えた。

「そやな、ショーン。それで、今何言うたん」

同時に純奈の「何言うてたん？」という声が聞こえた。

「ほんまに知りたい？」

ショーンはそれを横目に聞いてきた。

「めっちゃ」

俺は座りなおして、言った。

「えっとね、麻衣子に、『今、大輝に純奈のことを愛してるか聞いたんだ』って言うたら、『当たり前やんか』っていう返事が返ってきてん。それだけのこと」

ショーンは簡単に言ったけど、やっぱり俺は色々と驚いた。

#13 月浮かべた海渡る船

夜の十一時を回って、そろそろみんなの口数も減ってきたころ、純奈が言った。

「さっき一応ゆうこさんに電話入れてんだけど、大輝ここにおって大丈夫なん？」

言われて初めて気がつく。今や俺以外みんながこの家の住人だということに。

「せやなあ。お父ん、たぶんもう寝とるし、帰るわ」

純奈の声はただ心配で、「帰れ」とはもちろん響かなかったけど、そう言った。

「ほんなら純奈、家まで送ったれ」

麻衣子はちよつと酔っている。だけど酔いというよりは後ろで頷くショーンの影響で言ったと思う。

「あんたたちなあ…」

「片付けくらいしといたる。余計なことはせえへんし」

麻衣子がぽんつと純奈の背をたたくと、純奈が玄関に降ってきた。

「わかった。…いったらええねやろ？」

そう言うとは半ば強引に、今度は俺の背中も同時に押して、俺たちは寒空に放り出された。

「さむっ」

純奈が言うのと閉まった扉がわずかに開いて、麻衣子の手がダウンジャケットをくれた。純奈はそれを羽織って、仕方なく歩き出した。

「あたしたちのこと、勘違いしてへんか？あの夫婦」

さつきからちよつと声が大きかったのは、たぶん純奈も酔っているからだ。俺は「近所迷惑やで？」と注意してから、「ほんま、勝手な夫婦やな」と笑った。

「めっちゃ幼なじみや言うねん」

純奈のポリュームが全く下がらない。俺がショーンといろいろな話

をしている間に随分飲んだようだ。「うへえ」とか「あはははは」とかいろいろ言った。

「お前、一人で帰れるん？」

むしろ心配だった俺は聞いたけれど、「大丈夫」と言った。それから冷静な顔に戻って、語るに、「楽しい時間は笑てたいやん。やであたしは別に酔ってへんよ」ということだった。

「それならええねん」

俺は純奈の家に向かっていたときのように歩く速さを少しだけ早くして言った。風でもともと麻衣子ほどではなかった俺の酔いはすっかり覚めてしまっている。

#14 ぼんやりもう一度その手を

案の定俺のお父さんは深い眠りについていて、お母んだけが薄くらいりビングで裁縫をしていた。ひざ掛けと、無音のテレビの光を浴びた顔。暖炉が似合いそうだと何となく思ったのはいつものことだった。

「遅くまで大輝をゴメンナサイ」

純奈は小さく俺の横で謝って、一瞬俺の顔を見た。

「ええのよ、今日くらい。純奈ちゃん、楽しかったやろ？」

「うん、めっちゃ」

俺は着ていたコートを適当に脱いで、なんとなくその会話を聞いていた。親子のように歯切れが良くて楽しそうな会話だった。俺はむしろただ一緒にいた幼馴染みたいになって、割って入る隙間を探した。

「ほな、純奈ちゃん家まで連れて来いよ」

結局話は全く途切れずに、女同士の会話は異様に長い、なんて思っているやっとお母んが言った（言ってくれた）。

「それやったら帰ってきた意味ないやん」

「せやかて、女の子を一人にできひんやろ、純奈ちゃんは可愛いねやから」

「どこがや？」

「あ、言うたな？このやろっ」

「痛っ！なんでやー…」

「はい、お終い。さっさと行ったらええよ」

お母んは俺と純奈の腕をしっかりと結ばせて、言った。今度はまるで、親と兄妹二人みたいなリズムのいい会話だった。

俺は仕方なくコートをまた羽織る。で、今までの道を逆戻りしてまた外へでた。相変わらず寒い。

「ゆうこさん、やっぱ優しいんやな」

純奈は文句一つ言わず―それはそうだけど―、むしろ嬉しそうに言った。

「あーいうんはただのおせっかいやんけ」

「あたしはめっちゃ嬉しいけど？」

そう言うとき純奈は俺の手を握った。冷たい空気とは逆にとても暖かい。

「お前、酔ってるん^{ちゃ}違う」

言っただけで純奈から返事はこなかった。代わりにぎゅっと一瞬だけ手を強く握った。

「昔みたい」

純奈はほとんど呟くように言ったから今度は俺が返事をしなかった。暗い空を見上げてその、純奈の指す昔の記憶をぼんやり掘り返した。

たぶん、そんなに遠くない昔。高校生だったと思う。同じように暗い夜で、街灯が点々とある坂道―それはなぜだかはっきりと覚えている―。学校の進路相談のことで遅くなったか、文化祭か何かの準備で遅くなったのか、俺たちは帰る方向が一緒ということであつた。一緒に一緒に帰っていた。

完全に下り坂を降りきったところで、真上にあつた街灯の寿命がちょうど切れて、半径二メートルのひかりの円が突然消えた。そこで純奈がふいに俺の手を握った。

「勘違いせんというて」

純奈はそれだけ言って、ぐいぐいと俺を引っ張った。

「怖いねん」

何も言っていない俺に純奈は更に重ねる。

「何も言ってるへん」

俺はそのまま純奈の家まで連れて行かれた。

#15 十二番目の点のひとつ

結局純奈を家まできっちり送っていった。早いけど、もうほとんど酔いが覚めていた麻衣子がそのことを知っていたように「ごくろうさんでした」と言っただけで俺を見送ってくれた。純奈は眠そうな目でふらふらと玄関に「ありがとう」を残してリビングに消え、ションは「今度は僕が送ろうか？」なんて冗談を言った。

俺はちよつと後ろめたい気持ちを抱えながらも、純奈の家を後にした。

そして月曜日が始まった。正確には純奈の家から帰って風呂に入ったから寝るときにはもう月曜日だったのだけど。とにかく週の初めは重い空気と軽い空気が混じって、低い雲が泣いていた。昨日とは打って変わった天気なのか、俺はスーツを着て会社へと向かった。なんの変哲もないごく一般のサラリーマン。朝から会議に参加して、午後は休む暇もなくパソコンと格闘した。

あつという間に夜を迎えた。雨はいつの間にか上がっている。空気は水分を含んだまま固まって、空気がシンと冷えていた。シャーベットみたいな空気。

「あれ？」

そう言われたのは帰りの駅のホームだった。

振り向くとそこには長身のションが。初めに首元が目に入ってきたので驚いてきよきよしてしまった。しかし着ている服でさすがにそれがションとわかった。

グレーのタートルネック。誰がどう見ても百パーセント外国人—というか、実際にそうなんだけど—のションにぴったりだった。

ひよい、つとそのグレーの影から麻衣子が顔を出した。何故か「えへへ」と笑う麻衣子の手には本屋の紙袋が握られていた。

「すごい、大輝。社会人やで！」

スーツ姿の俺をよっぽど珍しいものを見るように言っていた。

「どーせ、似合ってたへんよ」

俺は口を尖らせて言う。ショーンが顔を赤くして笑った。麻衣子もくすくす笑った。

「何してたん？」

これ以上何か言うとうち自分が傷つく気がしてならなかったから、俺は話題を変えてそう言った。

「実はなこれ……」

そう言うとうち袋の中から本を一冊取り出した。本はカバーがしてあって何かわからなかったけれど、文庫本よりは大きいサイズの本だった。何の本か聞こうとしたら、ちょうど電車が通過して、駅が騒音に包まれた。

「見てみい」

そう言った気がする。そして本を差し出された。『赤ちゃんの名前辞典』。麻衣子は特別幸せそうに笑った。

「ほんまはな、男の子やったら大輝。女の子やったら純奈にしようと思てんけど。ファミリーネームがハルフォードやから、カタカナもええかなーなんて」

俺の持っていた本をべらべらとめくって、イギリスで人気の名前、というページを開いた。そう、麻衣子はまだにもこの街に馴染んでいるけれど元はイギリス住まい。結婚式が終わってしまえばまたイギリスへと帰っていつてしまうのだ。

「ウィリアム……。ダニエル……。ソフィー……。オリビア……」

俺がぼうつと読んでいると、電車がやってきた。俺は夢中のまま電車に乗る。

「まあ、ずいぶん気が早いけどな」

ショーンが呟くのが聞こえて俺は微笑した。まだ後七ヶ月もある。ゆっくりと考えればいい。そういう思いが一度に込められていた。

「あれ？」

そう言われたのはなぜだかオリバーという名前に目があったのとは

ぼ同じ瞬間だった。

本の上から顔を上げると、ショーンではない声の持ち主がさも驚いた顔で俺とショーン、それから麻衣子をくるりと眺めた。

「大輝、お前まさか…」

ぐうっと目が大きくなったそいつ。間違いなく、大学の同級生だった萩本聡一だった。相変わらず、うるさい。

「おい、聡一？」

俺は慌てて言うが、止まる気のない聡一は「できてもた!？」と電車のがたがたより遥かに大きな声で言った。ちらっと麻衣子を見ると、「変な友だちやなあ」と麻衣子と目が合った。十二号車の目線は全てこちらを向いた。

「俺の子どもはいーひん。この夫婦の子どもや」

俺は溜め息を吐きながら、麻衣子の右手とショーンの左手をぐいっ
とひっぱって重ねた。呆れたのか何なのか、噂が好きそうなオバサン意外はまたそれぞれの目線をそれぞれに戻した。

「なんや、今年最大の驚きやったのに。せやけど、俺に相談なしに結婚なんてせえへんよな、うん」

いちいち大きくてうるさい反応で聡一は言った。

「こいつ、酔ってるわけ違^{ちや}うねん。なんていったらええねやろ…これが普通…?」

ショーンと麻衣子は顔を見合わせて笑った。そして、麻衣子が小さく耳打ちした。

「ショーンのパパもな、いつもこんな感じやねん」

ちよっと意外だった俺は「そうなんだ」といったけれど、聡一の次の言葉に遮られた。

「嫁はんはべっぴんさんやなあ、幸せもんやでえ」

ショーンの肩をとんとんと叩く。ショーンはそれを笑顔で受け止めて、「せやろ、せやろ」と不釣合いな日本語で言う。聡一が「日本語の発音とか色々うまつ」と驚いたのは言うまでもない。

やがて聡一は俺たちが降りる駅の前で「ほな、おおきに」と言っ

て消えていった。

嵐が去った静けさと、台風一過の笑顔がそこにはあった。

#16 星の形を知るものの夜

「あたし、べっぴんさんやて…」

「あほかっ」

ドアのガラス越しに映る自分に見とれているようなうつとりとした顔で言う麻衣子に俺とショーンが突っ込んだ。麻衣子は「えへへ」と視線をこちらに戻す。そうしたらもう降りなくてはいけない駅に着いた。

冷たい空気が再び俺たちを包む。

「あ、おった、おった！」

ホームには何故かスーパーマーケットの袋を持った純奈が立っていた。今日は本当によく人に会うなと思って「どないしてん」と聞くと、純奈は俺たちが電車に乗った駅を一足早く通過した電車に乗っていたことを丁寧に説明した。

「うん？つまり、電車に乗ってたところを見て…？」

丁寧に混乱してしまったショーンには麻衣子が英語で説明した。「今日は仕事が早く終わって佳奈さんと一緒にデパ地下行ってきたん」

それから純奈は抱えているスーパーの袋のことについて説明した。久しぶりのデパ地下で果物を衝動買いしてしまったらしい。とげとげのドラゴンフルーツ、そのまま星の形のスターフルーツ、大きくなりすぎたオレンジみたいなポメロ。それから干しりんごと干しバナナを買ったと楽しそうに話していた。

ちなみに、佳奈さんというのは純奈の働いているフラワーショップによく来てくれる常連さんの一人で、歳が純奈と一歳しか違わないーしかし一時の母で、三歳になる子どもがいるーこともあり、お店以外でもよく連絡を取り合っている友だちだった。以前に一回あったことがあるが、さばさばとした、お母さんにぴったりの感じの人だった。

「せや、今度麻衣子に紹介したげる。子育ての事聞いたらええよ」

「ほんまかあ？それは心強いわ」

二人はあまりにも楽しそうに会話するから俺とショーンはまたそこへ入れなくなってしまうた。

それからしばらく歩いていると、ショーンが俺に言った。

「緊張するよ、これから親に会いに行くんだ」

俺はその一言で思い出す。そう、あしたは二人の結婚式。もうすっかり二人が夫婦だったからか忘れてしまっていた。昨日の夜に明後日に結婚式挙げるからきてほしい、と言っていた。

「幸せになるんに、緊張せえへんでも…」

俺は言ったけど、がちがちになるショーンの気持ちもよくわかった。人生で一番大事なことから、緊張して当たり前なのだ。

二人は家までまだ半分も来てないところで両親に会う、と言って俺たちと別れた。麻衣子とショーンの両親は向こうイギリスで既に何度も合っていて仲がよく、一緒のホテルに泊まっているそうだ。それぞれの結婚前夜を過ごすためにショーンは今日決めてきたお店でディナーを。麻衣子は思いでも地巡りとして俺たちの住む街や通っていた学校を散歩すると言っていた。暗い夜道でそんな二人の後姿は幸せの塊のようにひかってみえた。

「あたし考えられへん」

完全に二人が見えなくなると純奈が言った。俺は何となくもの言いたそうな表情に次の台詞を待った。

「結婚式の前って、どんな気持ちなんやろって」

やけにまじめで、明日が麻衣子たちの結婚式ということをはっきりと意識させられた。すると、急にどきどきしてきた。

「緊張と違^{ちや}うかな？」

俺は感じたまま言ってみた。

「それもある。やけど、あたしは嬉しくて舞い上がるかもわからん」確かに、と俺は思った。それでさっきそうやってショーンに言ったのを思い出した。明日は幸せのスタートライン。――緊張せえへんで

も…。

「まあ、後で麻衣子に聞いてみるし！ほな、はよ行こう？」

俺たちははじめにものを考えすぎていつの間にやら立ち止まっていた。純奈は「半分持って」と明らかに重たいほうを俺に渡してから走り出した。

そこはちやうどいつかの坂道で、袋から果物がごろごろ、と坂道を転がってしまうべたな展開を思い浮かべて苦笑した。

#17 二つの島国で愛される花嫁

結婚式は思っていたよりも日本的に行われていた。最初こそ教会で英語が飛び交う誓いとなったわけだけれど、それ以外はいつか行った親戚の結婚式と形式は変わらなかった。

「日本でやるからには、と思いまして…」

今日の主役は日本語でそう言って、その後に流れるような英語で、たぶん同じことをもう一度言った。ハルフォード家や、ショーンさんの友人に対して。その度に拍手が起きた。「めっちゃうまいやん！」と実は一ヶ月も前にエアメールで既に結婚のことを知らされていた中山美咲は拍手をしながらそう言った。

「せやろ」

純奈はまるで自分が誉められているように嬉しそうに言った。二人とも普段は着ないようなドレスを着ていてやたらと（爪や目が）煌々としていた。

俺たちの席にはそれ以外に麻衣子のイギリスでの友人であろう日本人の女の人とハーフで、しかも双子―たぶんだけれど、純奈曰く目じりの辺りがそっくりだから―の姉妹などがいた。姉妹は二人とも片言で、それ以外はショーンさんと同じように普通に違和感のない日本語だった。

乾杯をした後、純奈と美咲は一通り挨拶―マイネームイズミサキ、マイネームイズジュンナ、デイスイズタイキーをして、早速、周りの人という会話が始めた。

「リズとシャルロットは、双子なん？」

美咲がどこで習ったのか丁寧な目の前にある料理を食べてから、聞いた。

「あ、いいえ。わたし、お姉ちゃん。シャルロットは弟…あつ、えつと…」

「妹？」

しかし結局美咲は行儀悪く口にもものが入ったまま、手で口を覆ってそう言った。

「あ、そうそう。妹です」

「超可愛い」

純奈は笑顔でそう言った。

「けど、こっちの朝ちゃんも可愛くない？」

美咲が言うと、朝ちゃん―本名は朝田朝子で、朝型ではないです、とのこと―はにっこりと目を細めた。

「あたしは二人のほうが可愛いと思うよ」
人懐っこい笑顔だった。

「アッハッハッハッハッハッハ」

そのときだった。会場内にそんな笑い声が響き渡る。聡一に似ているというショーンのお父んの声だった。大きな身体で力いっぱい、本当に幸せそうに笑っている。

「あたしら、麻衣子のお母さんといっってくるし」

純奈が突然そう言った。たぶん、ショーンのお父んを見て思い出したのだろう。ちゃんとした挨拶がまだだったということ。

「俺も行っとく」

そう言おうとしたら美咲は「ええ子にしてなあかんのよ？」と言って俺をしっかりとイスに座らせた。仕方なく周りを見渡した。

麻衣子はショーンとなにやら話をしている。純奈たちも同様に。ショーンのお父んがショーンよりも大きいことに気がついた。

ふっとテーブルに視線を戻すとリズとシャルロットは少し困った顔。朝田さんだけは楽しそうに、にこにこしていた。

「大輝さんもやっぱり麻衣子の旧友なの？」

朝田さんは質問というよりもちょっと緊張していた俺に大丈夫ですよ、と安心させるためにそう言ったと思う。けれど、会話が途切れても困るので俺は言った。

「あ、うん。ほら、純奈…ここに座ってたやつと、美咲…こっちな、と俺でよく遊んでたり、しててん。たぶん…」

「たぶん？覚えてないの？」

「昔の事やし…」

「あっ、そーか」

子どもじみた話し方はすぐ親しみやすく、いつの間にか俺は硬い表情が崩れていた。すると、さっきまで怖がっていたのか、リズが口を開いた。

「わたし、日本語うまくないけど、よろしくおねがいします」

「おねがいします」

シャルロットも続けて言った。一生懸命さがしんと伝わってきた。

「三人はさ、麻衣子とはどうやって出会ったの？」

俺は純奈の後姿を見て、女同士の会話は長いと思いながら質問した。

「わたしは、大学で一緒の、ゼミとってたんです」

「それでわたしはリズの紹介でお友だちになりました」

「素敵な人です、マイコは」

二人は息ぴったりに一人の人が話すように会話のパスをして答えた。

「あたしは高校のときに転校してきたの。それで、学校に日本人…麻衣子はクォーターだけど、が麻衣子しかなくてさ、すぐに仲良くなっちゃった。すごい麻衣子って不思議に好きになれちゃうんだよね」

朝田さんもそうやって麻衣子を誉めた。三人の瞳はまったく澄んでいて嘘は一つもないように思えた。

今日の主役は世界中で愛されているみたいだ。

#18 間のかたちをみつけたときは

「あれ？大輝モテモテやなあ」

戻ってきた純奈がからかうように言った。

「はい、おりこうさんやったなあ」

美咲もそれに続いて俺の頭を撫でた。リズもシャルロットも朝田さんも必死に耐えようとしていたが遂には笑い出した。

「がんばってください」

リズが笑いながら言った。これには純奈たちも笑う。

「大輝君の扱いひどいなあ」

そう言いながら朝田さんもからから笑う。決して大口を開けるようなことはしないけれど。

「まだ時間ちよつとあるみたいやし、もつとお話せせん？」

純奈は席に着いて笑い声の中で聞こえるようにちよつと大きな声で言った。

リズたちは同時に首を縦に振って、朝田さんは、「いいよ」と返事をした。

「じゃあ、みんなはどこで麻衣子と知り会っ…」

「それはさっき俺がしまった」

俺は純奈の言葉を遮った。それだけでもまたみんなは笑った。

結局、俺たちは理想の結婚相手という合コンのような話で盛り上がった。純奈は安心できる人なら誰でも。リズとシャルロットは同時に背の高くて優しい人と答えた。そして、朝田さんは好きって気持ちで全身で受け止めてくれる人。美咲はお金持ちっていいかも、なんて言って笑いをとっていた。ちなみに俺はいつも笑っている人と我ながらあいまいなことを言った。

それから俺たちはみんなで麻衣子のところへ言って数え切れないくらい写真を撮った。

「ちよつと、大輝君が入ってない…。気持ち右寄りで…」

朝田さんは普段、カメラを趣味としているらしく、写真のことはうるさかった。「一生に一度だし、麻衣子が超綺麗だし、みんな写ろう」と声を上げて写真を撮っていた。

男ならその瞬間に少しはションさんがうらやましくなるほどそのときの麻衣子は美しかった。笑顔がよく似合って、ドレスがよく似合って、小学校のときの記憶とは似ても似つかなかった。不思議な感じ。美咲でも、純奈でも、幸せになればこんなにも綺麗になれるものなのだろうか。気がついたらそんなことを考えていた。けれどすぐにそれが一概に笑えることなのかわからなくなったので考えるのをやめた。

とにかく今はションのためにも麻衣子のためにも笑顔をプレゼントしたかった。

「ほら、大輝君、もっと笑ってよ！」

「大輝、怒られてばかりやん」

朝田さんが言うのと麻衣子にそう笑われた。そして、リズがまた「がんばって」と俺にエールをくれる。それが見事に笑いになって、セルフタイマーにして朝田さんが入ってきたタイミングもぴったりにみんなが笑顔になった瞬間にシャッターが切れた。やっと満足したらしく、そろそろいっか、と朝田さんは三脚をたたんだ。

#19 真実の微笑みが薄い世界を面白くする

お色直しをすると麻衣子は青い瞳の和服美人になった。朝田さんは「麻衣子ってほんと、なんでも似合うよなあ」と感心していた。しかしショーンの袴姿も日本人より似合っていてすごくかっこよかった。ハルフォード家にもその姿はとても好評らしく、カメラのフラッシュが絶えなかった。もちろん、朝田さんは本格的なもので、本格的に撮影している。

二人はドラジェサービスをして各テーブルを回った。パステルのドラジェが麻衣子の着物と合っていて、細かいところのこだわりが見られた。

「きれー…」

美咲は宝石を見るようにドラジェを見つめた。

「これ、イギリスのお店から取り寄せたやつなんだ」

麻衣子はふんわり笑って言った。俺はお菓子を貰った子どものような気分になった。

全ての人に配り終わると、司会者によるとショーンのいとこの子どもの、ビルとエミリーが麻衣子とショーンにそれぞれ綺麗な花束を渡した。

「あれな、実はうちの店のやつやねん。店長の自信作」

純奈が自慢げに耳打ちしてきた。それからちよつと話を聞いてみると、どうやらショーンの家族には結婚式以前にお店で既に会っていたようだった。

麻衣子たちの受け取った白い花、ホワイトスターの花言葉は『信じあう心』らしい。

「素敵ですね」

シャルロットが言った。純奈は嬉しそうに「せやろ？」と言ってシャルロットのほうを向いた。

「え？」

向いた瞬間、純奈が言った。

「ん？」

驚いて俺もシャルロットを見た。すると、シャルロットではなくその隣―リズ側ではないほう―に見慣れない男が一人こっそり座っていた。

確かに席が一つ余っていたから、遅れてしまったということだ。ここに座ってもなにもおかしいことはない。ただ、一つ奇妙なのが俺と純奈、そして麻衣子をずっと見ているけれどたぶん美咲にもその人が見覚えがあったからだ。

「高坂君？」

きっちりとしたスーツ姿。真面目そうなめがね。先に声を出したのは純奈だった。しかし俺も同じ事を言おうとしていた。高坂一ノ介。おじいちゃん命名のその名前。久しぶりだった。

「久しぶりだなあ、純奈ちゃんと、大輝。それと、中山」

「あたしだけ苗字かいな」

美咲は特に驚くこともなくそう言った。それから、「実は手紙に来るって書いててん」と付け足した。

「新幹線に乗り遅れちゃってさ、急遽私鉄乗り継いできたんだよ、疲れた疲れた」

本当に疲れたように、ぐったりとテーブルに手をついた。そして、リズとシャルロットを見て、英語でたぶん「始めまして、俺の名前は高坂一ノ介です。教師やってます」みたいなことを言った。中学の英語の教師になった高坂にとってそれくらいは簡単なことだった。

「次は、ご友人代表のスピーチです」

司会者がそう言ったのはそれからすぐのことだった。ずっと、胸に手を当てた純奈が立ち上がった。俺はまた驚く。いつの間に頼まれたんだか。

「純奈ちゃんの通訳かあ」

それからどうやら通訳を頼まれていた朝田さんが立ち上がった。

「あの人、めっちゃすごいなあ」

高坂は朝田さんを見てそう言いながら、英語の部分で笑っていた。この席で英語がわからないのが俺と美咲だけでなぜだかひどく悲しく感じた。

やがてスピーチが終わると、今度は麻衣子が、両親に宛てた手紙を読む、と会場のほぼ真ん中へ移動して両親のほうを向いた。

「うわ、綺麗になったなあ」

高坂はそれ以上は言葉を奪われてしまったようで、黙って手紙を読む麻衣子を見ていた。俺も、それに見とれてしまっていた。

#20 あたしのすべての一瞬

あたしだけのお父さん、お母さんへ

こうやって手紙を書くのはもう何十年ぶりですごく緊張しています。とっても下手な文章で、本が大好きなお父さんは怒りたくなるかもしれないけど、聞いてください。

あたしは小学校の頃、お母さん仕事のことイギリスへ行くことを最初はすごく反対でした。せっかく友だちができて、毎日楽しいと思ってたのにそれをお母さんに崩されるような気がしていました。今考えると本当に親不孝な娘だったと思います。実際、お母さんはもちろん、あたしと友だちの仲を裂くようなことはしなかったし、むしろあたしに『空の飛び方』というのを教えてくれました。背中に乗せて、大空を飛ばたいくれました。

イギリスという異国の地で、言葉も通じないし、友達も一人もない。けれど、お母さんはあたしのことを全て受け止めてくれて、大丈夫だよって言うてくれて、それであたしは落下していた身体をお母さんに救ってもらった気分でした。

そして、お父さんは、あたしにとって上昇気流でした。飛び方を覚えてあたしをもっと高く気持ちのいい場所へ飛ばしてくれるとても力強い風。あたしが進路のことでもよっているときのお父さんの言うてくれたことを忘れていません。「パパは頑張る。麻衣子が持つて可能性っていうものを一つでもなくさないように、できることはなんだってするからな」お父さんはやっぱり強いんだな、と思いました。この一言のおかげで今のあたしがあります。

お母さんの飛び方、お父さんの上昇気流。あたしはその二つがあって、大空で色々な人と出会うことができました。ここにいます友達、

そしてションさんとその家族。みんなみんな大好きです。そして
お父さんとお母さん：I do love beautiful
m a m a n d c o l d a d .

あたしはこれから、ションさんと一緒に羽ばたいていきます。時にはションさんの背中で休んでしまうこともあるかもしれませんが、また、飛び方を知りたくなったり、高く飛びたくなることもあるかもしれません。でもあたしはお母さんとお父さんの子どもだから、心配はしないでください。頑張って、自分で高いところへいつか飛び立ちます。

長い間、本当にありがとうございました。
麻衣子より

#21 遠い遠い重なる何か

自分で言うのもなんだけど、あたしは昔から結構計画性のある人だった。

結婚式ももうずっと前から日本でやることを考えていて、ショーと一緒にあたしの旧友の今住んでいるところをずっと前から調べていた。

あたしの初恋の相手、高坂君。親友の一人である美咲。

それから、一番の親友―というか兄弟のようだった―の純奈の住んでいるところも調べて、結婚式の招待状を送ろうとしたが、やめておいた。直接会って驚かせたかったし、記憶と純奈を信じていた。知らない間に勝手に信じられるのも迷惑な話だけ。

そのために、一応、純奈の幼馴染である大輝の住所だけは調べておいた。

日本に来て、実際に二人に会って、二人は驚くほどに変わっていなかった。小学生と大人が同じに見えるなんて変な話だけど、二人のなんとなくぎこちない幼馴染という関係も、すぐ口喧嘩になりそうな雰囲気も、大輝のたまに黙りこくって何を考えているのかわからない表情も、純奈の優しさも。なんにも変わってないような感じがした。

すごくよかったと思う。ショーにあたしの日本での生活がどれだけ楽しいか、温かいかを知ってもらえたし、なにより懐かしくてわくわくした。

「みんないい人だと思っててん」

純奈の家のベッドで寝ているときにショーは言っていた。いつまでも顔に馴染まない日本語で。

「え？」

「麻衣子の友達。ほら、リズとか朝子そやけど。すごーい優しくて

面白くてさ。温かいっていうたらええの？…純奈たちもそんな感じやった」

「せやろ」

いつだってシヨはあたしの思っている通りに答えてくれる。もしかしたら、似たもの同士なのかもしれない。サッカーのゲームでもいつも指示が被っていたことを思い出した。

「レフト！」

「ん？」

あたしは高校時代のサッカー部を想像していった。

「ダニエルのこと」

ダニエルはいつだってボールを持つと視野が狭くなっていた。ボールに集中しすぎてしまうのだ。

「ああ、ダニエル。懐かしいなあ」

「いっつも、前にしかドリブルせえへんし、パスも前だけ」

「いっつも、俺か麻衣子が言ってるやらかなかった」

「いっつもあたしらは声が被ってた」

『レフト！』

あたしとシヨーが同時に言った。

「…純奈、下で寝ててん。気をつけな」

「麻衣子もな」

あはは、とあたしは苦笑いをして、あたしたちも全然変わっていないんだなあ、と思った。変わったのは、シヨーが二人きりなのに日本語を話してくれていることくらいだ。

それからシヨーが静かに目を閉じると、あたしは「明後日はよろしく」と起こさないように言って、となりで目を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2550b/>

Il n'est point de bonheur sans nuages.

2010年10月13日17時30分発行